

◆久松久子 選 ～思ひ出の一句～

「冤罪の保君」

小学校は、一年から六年迄、組替えがなくいつも同じメンバーだった。その中で保君と言う体が小さくて、宿題をやって来ない、然るに成績は良くなかったが元気いっぱいの子がいた。何かあると決まって先生は「保だろう」と言って叱ってばかりいた。

五年生の時、黒板に悪戯書きを三人の男の子がしている時、先生の足音が聞こえた。消す間もなく三人は何食わぬ顔で席に着いたが、保君はいつものようにちょろちょろしているので「誰だ、こんなことするのは。保だろう」と叱られた。保君は、「やってない」と叫びはしたが、犯人を知っているのに、その名を言わなかった。先生は保君を横抱きにして、窓と窓の間の柱に縛り付けた。保君は「俺じゃない」と訴え続けたが、降ろされたのは一時間後だった。私をはじめとして誰も助ける人がいなかった。家に帰り、保君の家を探した。茅葺の一間きりの家の真ん中で漫画の本を読んでいた。「保君」と声をかけたら、はにかんだ顔を上げた。「今日ごめんね」と言うつもりだったが、「保君、遊びに来たの」と言ってしまった。保君は女の子と何をして遊んでいいのか判らない様子で、また漫画に目を落としてしまった。私は暫く立っていたが、「またね」と帰って来た。

名を呼べば涼しき瞳上げにけり 久子

「怖がりの私」

高校生の時、クラス対抗の音楽会があり、受持ちの先生から、ピアノの伴奏を担当するよう仰せつかった。家のピアノは離れの部屋に置いてあったが、夜遅くまで練習をした時は、母屋に帰るのが怖かった。庭は暗く、井戸と祠を横切ると、頭の上でボーボーと啼き声がする。庭には大きな欒の木があり、青葉木菟が棲みついていたのである。その鳴き声は、怪談の世界を演出する。

母屋めがけて一目散に走ったはいいが、勢い余って下駄を飛ばし、潜り戸にはよく頭をぶつけたものである。今思えば、あの青葉木菟は、私の慌てふためいた格好を見ては、木の上でホーホーと笑っていたに違いない。

臆病を見抜いてみたる青葉木菟 久子

「ジャガ芋畑」

戦時中、男の人は皆出征した。父もしかりで、そのために母も呉服店を閉め、店の手伝いの女の人達も男手のなくなった農家に戻って畠をするより他なくなった。家には使用人がいなくなり、家族だけになった。土地はあったので、農家の人に作物を作ってもらい、収穫だけしていた。

自給自足の時代で、学校の校庭は芋畑になり、運動をするどころではなかった。体操の時間は農業の時間になり、生徒達は薩摩芋の苗を植え育て、収穫できると商品として売っていた。学校の農作物は安いので、買ってくるようにと登校の時には風呂敷を持たされた。きょうだいの中でもその役割は私だけで、姉も妹も風呂敷を持たされることはなかった。姉は祖母に溺愛されていたので、長女にはさせられないということだった。妹は体が弱いのでランドセルを背負うのがやっとだったから、結局、私が買い物をするようになった。私だけがランドセルを背負い、風呂敷包みを下げて帰ったものである。

家でもっていた畑にも、ジャガ芋を収穫に行った。隣の村にあったが、母と弟と私の三人で、リヤカーを曳いて行った。弟はまだ小さかったので畦に遊ばせ、母と掘った。茎を引っ張るとゴロゴロとおもしろい程、大小のジャガ芋が連なって出てきた。「こっちの畝から始めるよー」「こんな大きいのもあったよー」と声を掛け合いながらの作業は楽しかった。リヤカーにたくさん積み上げ、その上に弟を乗せ、母が曳いて私が後ろを押し、唄を歌いながら帰ったものだった。

ジャガ芋の凸凹太郎次郎かな 久子

「蚊帳の中の講談」

商人の家は、両親は仕事で忙しく、普段、親子が接する時間は短い。そのため、子ども達には一人ずつお世話をする人を付けるのだが、その世話人から子どもが影響を受けることも多い。

戦争で、そのお手伝いさん達が居なくなると、今度は祖母や母と過ごす時間が長くなり、親密になった。祖母からは先祖の話聞き、歴史好きの母からは歴史や物語を聞かせてもらった。母は「今夜は岩見重太郎の狒々（ひひ）退治ですよ」と云っては、講談師さながらに熱演してくれることもあった。子どもには楽しい時間で、きょうだい皆、歴史好きになったのも母の影響だろう。

私が、今、古着でモンペや足袋を作ったり、袋を縫ったりして裁縫が好きなのも、祖母や母の影響なのだろうと思う。

灯り消し牡丹灯籠蚊帳の中 久子